



高齢社会
における、
人生の
つくり方。
の本



LIFE IS CREATIVE展
DOCUMENTARY BOOK

高齢社会における、
人生のつくり方。

Making a Way of Life in an Aging Society.

終活って 必要ですか？



手がかり

終活の再定義／死ぬための準備ではなく、よりよく生きるための活動として／コミュニティで支えられること／死を契機として生まれる縁

2015.10.12

Talk session

より

大きなブームになっている「終活」は、今回の展覧会でも大きなテーマに。会場には「終活ラボ」が設けられ、会期中、「今と未来の終活のはなし」と題して、星野哲さんと秋田光彦さんによるトークセッションが行われました。



星野哲

朝日新聞社
教育企画部ディレクター、
立教大学社会
デザイン研究所研究員



秋田光彦

浄土宗大蓮寺・
應典院住職

星野哲(朝日新聞社教育企画部ディレクター、立教大学社会デザイン研究所研究員)

「終活」というのは、2009年に『週刊朝日』で最初に使われた言葉で、自分の死後のことを準備していく活動のことですね。お墓のこと、葬儀のこと、遺産のこと。それはもちろん大事なことですけど、意外に抜け落ちているのが終末期の医療についてなんです。平均寿命に対して、健康寿命というものがあります。他人の介助なく過ごせる年齢のことですが、この平均寿命と健康寿命の差が少しずつ開いています。これが今のところ、約10年です。つまり、誰かのサポートを受けながら暮らさないといけない期間が晩年、あくまでも平均ですが10年ほどはあるということです。

*
言ってみれば死というものは、いろんな関係性や縁の結節点です。死を契機として、自分の関係性を見出すこともできるんです。生前契約、墓友、訪問ホスピス…終末期の終活にあたる仕組みや制度はいろんなものが生まれていますが、こうした終活を通して新たな縁を結ぶこともできる。私は「終活は身のため世のため人のため」と言っています。いろんな社会課題を実感して自分事として捉える、また社会のことを考えるきっかけとして終活を活用できたらいいんじゃないでしょうか。終活は単なる事務処理の話ではないんです。

秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)

亡くなったらどこへ行くのか。いまのいわゆる「終活」では、そういう話をしませんけど、「お迎え」という言葉、聞いたことがありますよね。「旅立つ」とも言いますが、亡くなった方は仏さまが迎えに来られて、あの世で生まれ変わる、そしていつまでも私たちを見守ってくださっている。そうした「死生観」を日本人は当たり前のもので共有してきましたけど、最近はその様子が変わってきました。死を悼む、弔うという感性が退化してきているように思います。

*
「死生観」というのは、知識でもなければ情報でもありません。説明して納得していただくようなものではなく、簡単にいえば、習慣なんです。「どうしてお葬式をするの?」と聞かれても、「お葬式はするものでしょ」というお答えしかできません。そうした死生観が空洞化した状態で、「個人」という厄介なものが自己主張をはじめています。いまの個人というのは消費者で、どうしても効率や合理性など、自分が納得するための意味を求めますね。そこで死生観を語ることの難しさ…いつの間にか日本の葬送の風景が変わってしまったと感じています。

*
これからの日本は多死社会になっていきます。2030年の予測が年間160万人。大変な時代ですけど、私はひとつ希望を持っているんです。これまで勝ち組、負け組といった言葉でしか切り取れなかった日本のコミュニティを、助け合いや思いやりといったつながりを主軸にした新たな共同体として作り変えることができるのではないかと。ひとの死というものを、怖くて厄介なものとして避けてきましたが、死をもう少し身近に置いて考えることによって、私たち自身が家族や地域との関係をもう一度見直すことができるのではと私は思っています。



シニアってどんな人？

手がかり

シニア、高齢者、お年寄り、老人…さまざまな呼び方の何が正解か／何歳からシニアと呼ぶのかという問題／経験値が高い人のこと／魅力的な人／おしゃれな人／ひとくくりのシニアはいない。十人十色の個性

身近な人が
認知症になったら
どうしますか？



手がかり

相談する機関、頼る人の存在／地域でいかに支えるか。自助、共助、公助それぞれの働き／福祉以外の分野が果たせる役割

シニアの おしゃれって何？



手がかり

たんすにしまいこまれた服の活用、リメイクの可能性／
自己表現としてのおしゃれも／シニアだからこそ
できるおしゃれ!?

2015.10.25
etc.

Work -shop & Fashion show より

シニアのおしゃれ着をリメイクするワークショップを開催。
作った服を最終日に
「ライフ・イズ・クリエイティブファッションショー」で
披露しました。いいものを上手にリメイクして、
思い出はそのままに新しいかたちでよみがえらせる。
シニアだからこそできる、深みのあるおしゃれの楽しみ方かも。



1. 末本やすみさん・知り合いのお父さまの紺色の
絞り帯をブラウスに。シンプルなチュニック
丈のブラウスがシニアの体型を美しく見せる
/2. 野間久代さん・息子の結婚式、夫との金婚
式にも着た自身の羽織を仕立て直したドレス。
残り生地でケープも /3. 小林勝子さん・いただ
きものの着物でベストと8枚はぎのスカート
をリメイク。バッグは帯から /4. 栗野富江さん・
友人とのお出かけ用に作った紫のチュニックと
白いパンツ。頼廣さんと木下さんのコートのリ
メイクも担当 /5. 末永明子さん・大島袖の作務
衣は小林さんがリメイク。赤のバイピングがお
しゃれ /6. 頼廣安子さん・別注したガウンを赤
いコートにリメイク。兵庫区の老人会の副会長
さん /7. 益田茂広さん・个性的でおしゃれ大好
き。神戸おしゃれ男子の理想形 /8. 木下宏さん・
ウールの着物地で作ったコートに、黒いシャ
ツとジーンズのカジュアルスタイル。

シニアが
恋しちゃ
ダメですか？



手がかり

いつまでもキレイにの気持ちこそ／老いらくの恋、大歓迎／
「モテたい」と思うことで、より楽しく豊かな時間を過ごせる
ことも

定年って必要ですか？



手がかり

地域社会はシニアが持っているスキルを必要としている／
働くことによる介護予防の効果／年功序列のリセットとい
う機能、後進に道をゆずるという意味／のこされた時間
に対する意識の差

シニアが 本当に知りたいと 思っていることは 何でしょう？



手がかり

生の声をどうやって聞き出すか／知りたいこと、知りたくないこと／高齢社会を支える人材へのクリエイティブ分野からのサポートが必要／地域住民による地域の取材や編集が、人材発掘や役割づくり、コミュニケーションのきっかけとなること

2015.10.4

Talk session

より

今回の展覧会をタイトルにしたトークセッションで、雑誌『孫の力』の門前貴裕さんが話されていたことに、この問いかけに対するヒントがありました。話されていたことのほんの一部ですが、抜粋して掲載します。



門前 貴裕
雑誌『孫の力』
マネージングエディター

2013年から、雑誌のアートディレクターをデザイナーの寄藤文平さんをお願いをすることになったんですけど、その際に寄藤さんから「孫の力のリニューアルにあたって考えたこと」という意見をいただいたんですね。それを少しご紹介したいと思います。

まず、「孫」と言っても、僕のような40代の人間でも祖父母がいれば「孫」になりますけど、やっぱり孫をかわいがるというのは、孫がまだ小さくて祖父母が60歳前後の年齢じゃないかと。その上で、いまの60歳前後ってまったくお年寄りというイメージではないですよ。たとえば、「日本昔ばなし」のような世界だと、腰の曲がったおじいさんおばあさんが赤ん坊を抱きかかえるようなイメージが浮かびますけど、現代は決してそんなことはない。孫の方も「YouTubeが見たい」とかなってるような時代に、郷愁にひたるような、昔の暮らしはよかったという特集をしてもなかなか刺さらない。じゃあどうするのか。やっぱり60-70代になっても、一生懸命かっこよく生きてるリアルな背中を孫に見せることが大切なんじゃないかと。その人たち(60代前後のシニア)は、ただの消費者じゃなくて、清濁併せのむ社会で生きてきた人間、達人なんだから。そんなことを考えて、雑誌をリニューアルしたのが「死ぬまでマンガ。」って特集だったんですね。



これまでのシニアマーケティングというのは、60代からどうやって死んでいくのかといった、どちらかというと孤独な未来がテーマになっていましたけど、僕らは、いずれ死ぬことが決まっている中で、いまをどう生きていけばいいのかを追求していくことが大切だと考えています。これからの高齢社会をどう生きていくのかという、前向きな提案をしていきたい。毎号、巻頭で「スーパー遺伝子列伝」として、著名人のインタビューを掲載しているのですが、たとえば、その取材で田原総一郎さんは「仕事が生かしてくれる」っておしゃったんですね。高齢者の三大不安としてよく言われるのが、孤独、お金、健康なんですけど、田原さんによると仕事をすれば、その3つはすべて解消すると。80代になっても楽しく仕事をしている田原さんのような“達人”に共通するのは、やっぱりいかに生きることを充実させていくかを考えているということなんですね。

介護は 専門職にしか 関われない ものですか？



手がかり

地域包括の考えかた／専門職との役割分担／参照事例として、英国の取組みを知ること。デザイン、リサーチ、検証、クロスセクター、展開手法…について

2015.10.4

Talk session

より

こちらもP11と同じトークセッションで、
門前貴裕さん、博報堂の阪本節郎さん、
そしてモデレーターを務めた
永田宏和によってなされた対話から、
一部を抜粋して掲載します。



門前 貴裕

雑誌『孫の力』
マネージングエディター



阪本 節郎

博報堂
新しい大人文化研究所
統括プロデューサー



永田 宏和

デザイン・
クリエイティブセンター神戸
(KIITO) 副センター長

阪本: いまは60-70代が子世代で、80-90代が親世代、つまり60代以上の親子2世代ということが結構ありますね。そうすると、60代の団塊の世代に期待されるのは親世代の介護ですから、自分自身が要介護にならないために認知症ケアとか何かしら取り組んでいるという方がほとんどなんです。だけど、介護される側から介護する側になりましょうという「共助」の活動は、もっとやっていく必要がある気がしています。たとえば、若い介護員、ヘルパーさんが毎日の大変な現場で続けられなくなっているという状況があって、コミュニケーションの部分だけでも団塊の人たちが有償ボランティアで受け持つことで、介護員も本来の仕事に専念できるかもしれない。実際、アメリカでは80-90代の話し相手になる「コンパニオンサービス」というビジネスがありますが、その担い手は60代の女性なんですね。そういったことがこれからの考えどころじゃないかな。

門前: 60代前後の方々がキーになって、70-80代と結びつけていくということは理想的な形だと僕も思っています。ただ、自分自身が地域の活動に関わったりしていると、30-40代の主婦、お母さん方が実はキーになってるという印象もあるんです。子どもたちもそうだし、地域の重鎮みたいな方、そして30-40代の男性それぞれに声をかけて、うまくつないでくれるから機能しているところがある。だから、そうした女性の力があって、60代前後の方々が実働していければ、というのはまだ想像の域ですけど考えは始めていることですね。

永田: つなぎ手がすごく重要になりますよね。つなぐということを経営的にも、人材的にもどう考えていくかというところに、企業の関わる意味があるのかなと。もうひとつは、見かたを変えていくことで違う可能性が生まれることもあると思うんです。それは僕らの言葉で言えば「+クリエイティブ」ということになりますけど、今回の展示会もその実験のひとつですし、いろんなトライアルをはじめたところなんです。KIITOという場所でそういう試みを継続しながら、つなぎ手としての役割も担っていこうと思っています。



年を取ることって
大変ですか？



手がかり

老人力。弱さというクリエイティブ／経験値 > 体力／
自分本位に生きてみる／年を取ったからこそわかる新
鮮な出会いや発見／遅さ、弱さ≠ウィークポイント

孫と行ける
公園って
どんな場所？



手がかり

一つひとつの公園ごとにもっと個性があってもいい／大人
も子どもも使える健康器具の設置／公園をもっと利用した
い、公園の情報がもっとほしいと思っている／公園の愛称
を地域から募集／ゲートボール人口は減っている？

シニアだって 新しい技術を学びたい？

手がかり

教える先生の力も / 学ぶ場の楽しさ。学ぶ目的の転換 /
学んだ技術を使う場をどこまで準備できるか / 経験不問!?

2015.
9.5, 16,
28-30

Workshop

ものづくりの技や知識をプロの建築家と施工チームから学び、地域のイベントなどの現場で活かしてみる
試み。曾我部昌史さん、丸山美紀さん、長谷川明さんと、POS建築観察設計研究所のスタッフを講師に迎
えて開催しました。工具の使い方、材料の扱い方などの指導を受け、一部のデザインは参加者が行い、展
覧会の「会場づくり」を実践しました。



講師・長谷川明さんが見た、
ワークショップの可能性

工具の使い方と会場構成の基本方針
を共有した後は、参加者主導で3日
間の作業を共同で進めました。正直
なところ、どの程度、現場作業が進
められるのか様子を見ながらかと
思いましたが、結果的には参加者
各自が自主的に状況に合わせて役割
を見つけて、互いにサポートし合い
ながら段取り良く進められていま
した。それにもかかわらず、とても個
性的なデザインに着地していたのが
印象的で、経験の差と可能性を感じ
たところです。

宇山満三さん(68)

挑戦したいことはメダカの台作り。好き
なテレビは、スポーツ番組。アーチェ
リーをはじめ5年。

福本秀次さん(65)

喫煙歴43年、お酒は日本酒派。いずれ
リフォームに挑戦したいと考えている。

見通真次さん(27)

POSのスタッフ。挑戦し
たいことはホゾなどの
特殊加工。好きな映画
スターはジャッキー・
チェン。



川谷充郎さん(65)

土木技術者OBのネットワーク「CVV(シビ
ル・ベテランズ&ボランティアズ)」で活動。

松下良太郎さん(67)

居酒屋仕込みの手料
理が得意。好きな芸能
人は高倉健、太地喜和
子。実践的なモノづく
りを目指す。

※他に、金山正吾さん(80)、
平木豊さん(67)も参加

未来の自分の生き方。
どれくらい
想像できていますか？

手がかり

120歳になった自分を想像してみる／人生計画を立てることは終活を考える入り口になる／世代を問わない問題

地域に伝わる知恵や情報を
どう次の世代に手渡していけば
いいでしょう？

手がかり

とにかく形にしておくこと／その知恵や情報をいかに見つけ出すことができるか／シニアの話がおもしろいと思わせる仕掛け、きっかけづくり／シニアが集う場を生かす／地域のイベントとコラボすることで、様々な団体を巻き込める

こどもや孫にたくさんの
写真をのこすのは迷惑ですか？

手がかり

写真を捨てることの意味を考えてみる／一体、誰にとっての迷惑なのか。迷惑ということの意味／無駄なシャッターを切らない／家族で終活してみる。意識を共有してみる／とっておきの写真を厳選したアルバム

高齢者と若い世代に 共通の話題はありませんか？

手がかり

同じ世代で固まってしまう問題／ひとつの目的のために一緒に作業することで、共通の話題が自然と見つかる／話題が共通、答えが違うのが世代差のおもしろさ。はずれるキャッチボールを楽しむこと／いきなり話しはじめてみる

高齢社会における防災って？

手がかり

無理なく続けられる仕組みを取り入れる／地域で取り組みやすいメニューの提案・発信／無関心なシニアと積極的なシニアの差／現実には圧倒的に若い世代が足りない／興味を惹くような講座や研修会の開催／介護の技を取り入れる

シニアの料理教室は、 栄養価だけが重要ですか？

手がかり

食＝健康がすべてじゃない／認知症の予防としての料理体験／シニアのパン好きは多い／おじいちゃんだって料理がしたい／凝った料理を本気で試してみたら？

どうすればシニアに情報が 届くのでしょうか？

手がかり

文字を大きくすることが最適解か／シニアがウェブに弱いという先入観。シニアとSNSの可能性／ラジオ最強説／新聞を読み慣れた世代であることを改めて考える／老人クラブ連合会からチラシを配布／発信する編集部や制作チームにシニアを巻き込んでいくこと

LIFE IS CREATIVE 展、 この1枚。

期間中、記録撮影に入っていた3人のカメラマンに、
心にのこった名場面を挙げていただきました。



01



02



03

Photo by
伊東俊介

01・「70年も生きてたら緊張なんかせーへんわ！」って笑っておられた益田さん。若いボクの方が元気を頂きました／02・ファッションショーでは栗野さんの姿勢が特に美しかった。日常からの意識の高さの賜物だなと／03・石橋智晴さん（→p.33）の話聞く能力、整理する能力、デザインする絵心に驚嘆しました。それでいて、黒子的な立ち位置で淡々と仕事をされている姿が印象的です。

LIFE IS CREATIVE 展、
この1枚。



01



02

Photo by
大塚杏子

01・02・生きていく上で「食べる」ことが何より大切だと思います。しかし、何よりも難しいことでもある。美味しいものを食べる時間は、自分だけでなく周りの人も幸せにする力があるはず。ということで、「美味しい時間」の写真です。美味しいものを目の前にした幸せな顔がたまりません！ 皺の刻まれた手がたまりません！

LIFE IS CREATIVE 展、
この1枚。



01



02



03

Photo by
片山俊樹

01・リメイクワークショップは、みなさん和気あいあい、終始笑顔でいらっしゃるのが印象的でした。「1ミリをおろそかにしない」という、先生のお言葉も頂きました／02・バックヤードで黙々と作業をされていたクロエさん／03・この本、この著者との出会いで、黒色のものが白色に見えてくる、180度逆転する感覚を覚えました

高齢者のことがわからない。

私たち KIITO はまず、その認識から出発します。

だからできるだけ、自分たちの手で調べます。高齢者や専門家と会い、言葉を交わし、少しでも詳しくなろうと思います。そうすることが、高齢者の「ほんとう」を知る、いちばんの近道だと思ったからです。

今回の展示会がラボ（研究室）という形式をとるのも、

そんな気持ちのあらわれなのです。

私たちのこだわりは、それだけではありません。

現状を把握するのは大切ですが、そこで立ち止まってはいけない。

傍観者ではなく、あくまでも参加者として、そして未来の当事者として、いくつかのワクワクするような提案をしたいと考えています。

「クリエイティブ」をキーワードに活動する私たちからの、

それは少なからずユニークな提案になるはずです。

つくろう。何かを生み出そう。人生の後半にこそ、クリエイティブを。

それこそが、日々の暮らしにさまざまな感情や活力をあたえてくれるから。

そういう想いで開催される「ライフイズクリエイティブ展」。

シニアメディア、公園、恋愛、食など8つのテーマにおいて、

だんだんと見えてきたこと、それプラス、

クリエイティブなアイデアをご覧くださいませ。

神戸から始まるこの試みが、高齢者の新たなエネルギーとなること。

取り組みの輪が、やがては日本中に広がっていくこと。

そのふたつを願って。

LIFE IS CREATIVE展

高齢社会における、 人生のつくり方。

2015.10.3(土) - 10.25(日)
デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

シニアメディアラボ / 食ラボ / 公園ラボ / オールドタウンラボ /
シニア防災ラボ / 終活ラボ / 恋愛ラボ / 認知症プロダクトラボ

シニアメディアラボ



情報を受け取るシニア、そして情報を発信する人たち、双方からシニア世代に必要な情報のあり方を考えた。

関連
イベント

- omusubi トーク 地域情報紙プロジェクトのこれまでとこれから
- 編集を学ぶかべ新聞部
- トーク・アラウンド・ザ・ボックス

コンテンツ

シニアメディアライブラリ

「シニアのための」を強く意識したシニア向けメディアがあふれる中、固定観念を打ち破るような独自の切り口をみせる雑誌として、『孫の力』『つるとはな』などを紹介した。

プロの書店員が選ぶ 65歳からのブックリスト

京阪神の7書店のプロたちが、「65歳から読みたい本」各5冊を精選して紹介。経験と知識の積み重ねがあるシニアだからこそ、より深く本と向き合う楽しみを提案した。トークイベントでは、誠光社の開店準備中だった堀部篤史さんから、ブックリストで取り上げた5冊を軸に、シニアをテーマにした本を紹介していただいた。

地域の手と手を結ぶ できごとメディア「omusubi」の紹介

2012年にKIITOのゼミから生まれた、東灘区社会福祉協議会の広報紙「omusubi」。プロからコツを教わりつつ、地域のシニア+大学生の混成編集チームが取材・執筆を行ない、地域に暮らす人たち自身が地域の情報を発信している。その制作プロジェクトの変遷を掲示するとともに、会期中には、区の担当者や編集チームによるトークイベントを開催し、会場内の出来事取材して壁新聞を作るなど、制作のプロセスがわかるよう多角的に紹介した。

毎日、新聞を読んできた人も、
新聞をつくるのは
きつと新鮮です。

事例紹介: かべ新聞
まちに貼られた「かべ新聞」は、アナログだけれど親しみ深いメディア。Re:Sが各地で行なっているかべ新聞ワークショップでは、1日で取材、編集会議、原稿作成、デザインまですべてのプロセスを行っている。会期中にも開催され、神戸港で8年間信号旗を振るアクティブなシニアなど、神戸ならではのかべ新聞が仕上がった。

リサーチャー: omusubi壁新聞
会期中、会場内で起こった出来事、出会った来場者取材して「omusubi壁新聞」を制作。手書きのテキストにインスタントカメラで撮った写真を貼り付けた素朴なものだが、編集メンバーそれぞれの視点で、会場での動きや来場者の素直な反応がいまじりとキャッチされていた。

日直
日誌

軽食をとりながらのレセプションパーティー。食べたことのない味の料理に驚く人もチラホラ。いたるところで名刺交換がある一方、近くの椅子に座って談笑する年配女性のグループも。(10月3日(土) 18:00 担当:北野)

食ラボ

「職」のあとに、
つながりをつくるのは、
「食」でした。



「食」を通じたコミュニケーションや生きがいについて考えた。神戸市内で行われているシニア向けの「食」関連の取組みをリサーチして紹介、その応用・展開アイデアを会期中に実践した。

関連
イベント

- オープングレセプション ふれあい給食レシピアレンジ
- 男・本気のパン教室
- 「ライフ イズ クリエイティブ カフェ」

コンテンツ

ふれあいオープン喫茶

KIITOで開催されたゼミから生まれた「ふれあいオープン喫茶」の取り組みを紹介。既存のふれあい喫茶に、地域の資源を取り入れ、よりオープンな喫茶を目指すもので、地域の子どもがカフェ店員をしたり、地域の大学生が企画運営協力するなど、さまざまな世代が関わるきっかけを作っている。須磨区電が台、北区神戸親和女子大学などでの実施例も紹介。

ふれあい給食

神戸市内の「ふれあい給食」の様子を取材して紹介。バリエーションがある一方で、高齢者食には「ちょっといい」食事の選択肢が少ないことも明らかになった。そこで、ふれあい給食のレシピを、料理研究家の協力のもとアレンジし、本展のオープングレセプションで提供した。ハーブによる味付けのアレンジや盛り付けの再検討など、ちょっとしたアイデアで華やかに、よりおいしく食べられるような工夫ができることを実践してみた。

シニア男性による「本気」のパン教室

照れやきっかけ不足により、シニア男性は地域の活動に参加しにくいという課題に対して、「食」からのアプローチで解決できないか、と本気のパン教室を実施。神戸の人気シェフから本格的なパン作りを学び、家庭や地域活動に生かしてもらおう。会期中には、カフェ店員に子どもを起用した「ふれあいオープン喫茶」スタイルで受講者手づくりのパンをドリンクと販売。地域のイベント企画の一例を示した。(パン教室指導: 西川功晃 サ・マーシュ オーナシェフ)

事例紹介:
地域取組み=ふれあい喫茶/ふれあい給食/介護予防カフェ
地域では「食」を通じた世代間、地域住民同士のコミュニケーションをはかる取り組みが行われている。安価で誰でも参加できるが、継続的な運営のために資金確保や担い手の育成が課題になっている。
ふれあい喫茶:各地域の福祉センターや公民館で、飲み物とお菓子を提供
ふれあい給食:独り暮らしのシニア対象の給食サービス
介護予防カフェ:シニア向けにカフェ形式の集いの場を作り、介護予防に関する情報提供・啓発活動を行う。神戸市の研修を受けたカフェマネージャーが企画運営。

リサーチ:
ふれあい給食レシピ集『健やかライフ』
神戸市生活指導研究会による、ふれあい給食のため参考レシピ集。大人数用の分量や旬の食材を取り入れた毎月のレシピなど、実践的な内容となっている。

公園ラボ



公園で運動する
シニアがいると、
まちなも元気に見える。

超高齢社会における社会課題解決の場としての「公園」に注目。公園は、多世代間の交流の場となり、健康な身体づくりの場でもある。そんな国内外の公園事例を紹介するとともに、公園遊具メーカーが開発した公園設置用の健康器具を会場に置いて、その場でワークショップも開催した。(パートナー:株式会社コトブキ)

関連
イベント

- 連続ワークショップ「公園 × シニア × 健康の未来を描こう」

コンテンツ

屋外健康器具の体験

人工芝を敷いて、会場内を公園化。近年増えている屋外健康器具を設置し、来場者が体験できるようにした。背もたれ部分でストレッチができるベンチ、ランナー向けの準備体操器具など、公園器具は日々、多様化している。

国内外の公園事例

健康器具が人気の大阪・吹田の千里南公園や、公園活用情報を発信する公園検索アプリ「PARKFUL」など、国内外の事例を紹介。

みんなで未来の公園を考える

2014年、KIITOで開催した、公園の新たな活用方法を考えるゼミの成果を紹介。AXIS、IDEO、takram design engineeringと協働し、「公園」をテーマにしたクリエイティブセッションを開催するなどした結果、「ピザ釜のある公園」「地域住民の特技を教えあう学校がある公園」などのアイデアが誕生。「ピザ釜」アイデアは、実際にトライアルイベントも開催した。会期中には、公園と健康の未来を考えるワークショップを開催。未来の公園について意見交換を行った。ワークショップの成果は、新たに開講する公園ゼミ part.2でも活用されることに。

事例紹介:公園活用アイデア募集
「こんな公園があったら健康な日々が過ごせる」というアイデアを会場内で募集。「ずーっとあさのこうえん」「大きな岩とかがある、ちょっと冒険心をくすぐられる公園」「地面に線をかきやすい公園」「公園全部ハンモック」「可変する遊具がある公園(例:健康器具→バスケットゴール)」「ランニングのタイムがはかれる公園」...などのアイデアが集まった。

リサーチ:役立公園遊具・防災編
たとえば、かまどに変身するベンチ。災害時だけでなく、地域のイベントとして炊き出しパーティなどで活用すれば、有事に役立つスキルを身につける機会にもなる。

オールドタウンラボ

高齢化したまちを、
若返らせるのは、
高齢者だと思ふ。



まちも人も高齢化した「オールドタウン」で、シニアが活躍できる場面や役割について考えた。シニアが中心となり、世代間の交流を促すことでまちを元気にしている事例や活躍の方法も紹介。

- 関連イベント
- ワークショップ「ものづくり講座」
 - ワークショップ「いきいきとした地域づくりにおける高齢者の役割」

コンテンツ

高尾台・水野町 × KIITO の取組み

オールドタウン化が進み、2008年から「安全・安心で住みよい未来あるまちづくり」に取り組む神戸市須磨区高尾台・水野町地区。KIITOは2013年に高尾台活性化のアクションプランを考えるゼミを開講して以来、継続的に関わっている。展示会ではこの地域をひとつのケーススタディとして、まちのつながりマップを作成・展示し、地域のイベント企画実施状況を紹介します。また、KIITOのゼミから生まれ、高尾台で実施したアイデア「ワンちゃんパトロール」「TOD防災キャンプ」「ピザ釜のある公園」も紹介した。

千里ニュータウンの事例紹介

1962年にまびらぎした日本初のニュータウン、大阪府吹田市の千里ニュータウンにおける取組みを紹介。2014年千里ニュータウン情報館で開催された「ニュータウンを元気にした50のアイデア」展(運営企画協力:情報館ファンクラブ)は、全国で実践されたニュータウン再生の取組みをまとめた意義深い企画。その作品集を会場に設置、閲覧できるようにした。

ものづくり講座

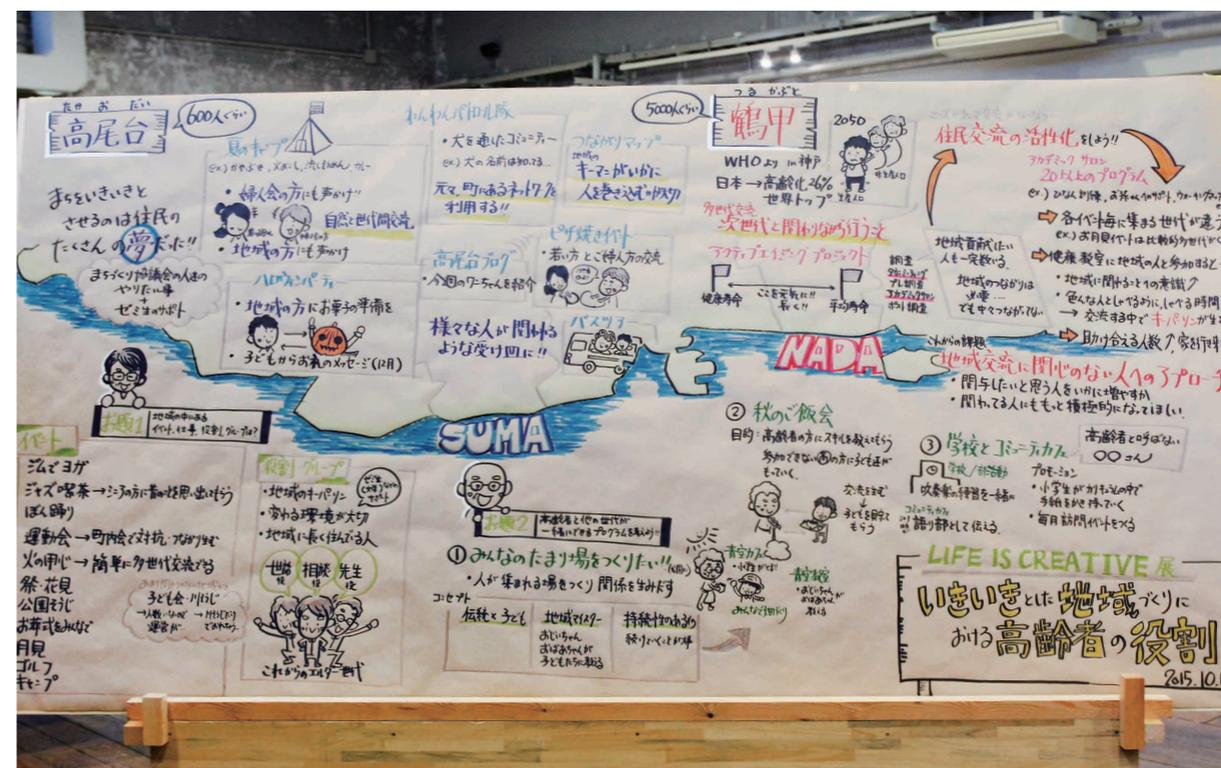
ものづくりの技や知識をプロから学び、地域でのイベント準備やものづくりの現場に、スキルを活かしてみたいシニアを募集して講座を開講した。工具や材料の扱い方などの基礎知識を学んで、会場内8つのラボのファサード(入口)を設計し、実際に施工を行った。

事例紹介:
鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト
2013年から行われている、神戸市灘区鶴甲地区と同地区にある神戸大学との協働の取り組み。お互いのリソースを総合的に活用することで、住民が心身ともに健やかに暮らせるまちづくりを目指し、アカデミックサロンの開講などを行っている。会期中には、神戸大学のチームを主体にワークショップも開催。「高齢者の地域での役割」「高齢者と若い世代がコミュニケーションをとる方法」についてのアイデアを、来場者と一緒に考えた。

事例紹介:情報館ファンクラブ
ニュータウンの成り立ちや魅力を伝え、資料を収集・公開する「千里ニュータウン情報館」を盛り上げようと、130人のゆるやかなネットワーク組織「千里市民フォーラム」のメンバーが中心になって2014年に立ち上げた。

リサーチ:60歳以上、60歳未満 お互いに共感ポイント!!
互いの世代を知るために、共感できること、共通の話題を探るアンケートを行った。「自分をハッピーにするものは?」「恋」「出歩くこと」/「最近ハマっていることは?」→「絵を描く」「ガーデニング」など。

石橋智晴による、
ファシリテーション
グラフィック



10月11日、オールドタウンラボで行われたワークショップ「いきいきとした地域づくりにおける高齢者の役割」、10月12日、終活ラボで行われた「今と未来の終活のはなし」10月25日、最終日に行われた「ワクワクする高齢社会にむけて」。3回のイベント中、石橋さんによるファシリテーショングラフィックが行われました。その場で話されていることをライブで、即興的に書き留めていく石橋さんの技術に参加者も登壇者もびっくり。なお、今回は「ファシリテーション」要素は抑えて、参加者の振り返りの助けとなるように記録していただきました。11日のワークショップの雰囲気は少しでも伝わればと、ここに石橋さんによる記録を再掲します。

シニア防災ラボ

シニア視点の防災は、女性や子供にもやさしい。



高齢化社会における防災について考えた。シニアのための防災訓練だけでなく、シニアが担い手となり多世代が参加するプログラムについても考察した。
(パートナー: NPO法人プラス・アーツ)

関連イベント

トークセッション「高齢社会における新しい防災のカタチを多面的に考える。」

コンテンツ

イザ!カエルキャラバン!

子どもが遊びの延長で防災の知識を身につけられる防災訓練プログラムと、美術家・藤浩志が考案したおもち交換会「かえっこバザール」を組み合わせた防災イベント「イザ!カエルキャラバン!」を紹介。2005年の開発以来、国内外に広がり、地域に合わせて簡易版・応用版のプログラムが開発・実施されている。シニア中心の地域向けにカスタマイズした防災訓練も検討されている。

国内外の「楽しみながら学ぶ」防災

神戸をはじめ、インドネシア、タイ、フィリピンなど、災害多発国のクリエイティビティあふれる防災活動を紹介。国内では、多聞台防災福祉コミュニティ(神戸市垂水区)、本山第二小学校区防災福祉コミュニティ、一寺言問を防災のまちにする会(東京都墨田区)、上ノ原まちづくりの会(東京都調布市)、亀沢3・4丁目町会(東京都墨田区)の取組み事例をリサーチして紹介した。地域に寄り添い、多世代を巻き込むことがポイント。会期中には、滋賀県高島市で独創的なアイデアで防災事業を展開する「なまず」、神戸市の入江地区防災福祉コミュニティとともに意見交換するトークイベントを開催し、シニアのための/シニアが担う「防災のカタチ」について考えた。

シニア向け防災グッズ

災害時、シニアが本当に必要とするものは何か。長年、クリエイティブなアイデアを取り入れた防災に取り組む NPO法人プラス・アーツが、メガネ、杖、失禁パッドなど、揃えておく便利なシニア向け防災グッズの一例を紹介した。

事例紹介:

神戸市消防局の防災意識アンケート調査
神戸市消防局が、震災20年へ向けて、地域の防災活動の現状や関係者の意識について行なったアンケート調査。対象は、191の防災福祉コミュニティ(防コミ)の役員573名。

リサーチ:

シニア向けのおすすめ防災グッズは?
介護の度合いなどによって必要なものが変わる、シニア向け防災グッズについてアイデアを募った。「体の凝りを解消するもの」(慣れない避難所生活で緊張を強いられ、体が凝るから) / 「ゼリー状の栄養補助食品」(とろみのある水分補給が大事) / 「遠近両用メガネ」(忘れがちだから、複数の人が使える調節可能なものがあとと便利)

リサーチ: 介護食を防災時の非常食に

災害時に配給される非常食が、シニアの摂りやすいものとは限らない。咀嚼や嚥下が困難な人のために摂取しやすく調整された「介護食」は、災害時のシニア向け非常食として有効だろうか。現在市販されている介護食を展示し、家族の状況に合わせて選べる非常食の可能性について考えた。
(協力: アサヒグループ食品株式会社)

終活ラボ

いちばんの終活は、思いっきり生きることです。



多様化する終活を、「残りの人生を充実させること」ととらえ、可能性について考えた。コミュニティでのサポートや、「編集」を通してエンディングライフを充実させる手法も紹介した。

関連イベント

「アルバム整理ワークショップ」
トーク「今と未来の終活のはなし」

コンテンツ

終活リサーチ

一般的に終活と言われている活動をリサーチ、紹介した。終活への認知が広がる傍らで、「棺桶体験」「墓友」「看取り婚」「樹木葬・桜葬」「終活フェア」など、一風変わった終活関連の活動が続々と生まれている。会期中にはトークイベントを開催し、「周囲に迷惑をかけるな」という考え方が主流の現在の終活から、コミュニティでサポートする終活へ、その環境作りの重要性が示された。

終活参考図書

終活に関連した本を紹介。おなじみのエンディングノートや、終活特集本はもちろん、山崎章郎『死の体験授業』、荒俣宏監修『知識人99人の死に方』など、「死」が意識されている本を集めた。

とっておきのアルバム整理

写真を整理すること。終活として考えれば、遺影の準備や、家族へ受け継がれる自分史ともなる。編集者を講師に招いて、選り抜きの写真24枚だけをまとめるアルバム整理ワークショップを開催。いろはにほへと、、、の順でたった46枚に凝縮することで、自分の大切にしてきたものをきちんと残す、終活としてのアルバム作りを考える機会となった。

リサーチ: あったら面白い終活

取り組んでみたくなるような、わくわくする終活のアイデアを募集。「死に装束作り」「ヘリコプター散骨」「自分史をつくる」「骨壺づくりワークショップ」「猫葬」などが寄せられた。

リサーチ: LIFE IS TAPE!

今までの人生とこれからの人生計画を書き込める、0~100歳までの目盛りがついた長いテープ状の紙を会場に設置。「65歳定年・兵庫に戻り節約~73歳・スウェーデン移住」「80歳・グルコサミン開始」「87歳・寿命、でもできれば最高齢更新」「100歳・流れ星になる」などの書き込みが見られた。

リサーチ&アイデア:

アルバム整理の困りごとって?
アルバムに整理できずに溜まっていく写真、その解決の緒のために、困っていることとのアンケートを収集。「順序良く並べたいのに日付が分からない」「そもそも時間軸で整理しようとしていくんですけどいいんです」など、アルバム整理ワークショップにおいて編集者が回答した。

恋愛ラボ

つながっている。
生きたい気持ちに、
モテたい気持ちは、



「恋愛」をテーマに、シニア世代の恋愛観の調査を行い、自分磨きとしてのおしゃれについて考えた。「おしゃれ着リメイクワークショップ」でよみがえらせた服を使ったファッションショーも開催。

関連
イベント

- おしゃれ着リメイクワークショップ
- ライフ・イズ・クリエイティブファッションショー 2015

コンテンツ

date.KOBE プロジェクト

KIITOのプログラムから生まれた、神戸でのデートの思い出をもとに神戸の魅力を再編集するプロジェクトを紹介。会場内で集められた思い出には、シニア世代の若い頃のデートや、昔のデートスポットをもう一度夫婦で訪れた思い出も少なくなかった。

MOTE INFO

モテるシニア像の提案、恋愛観の調査を行いながら、「モテるシニア案内所」「ライフ・イズ・モテみくじ」「モテ絵馬」などのプログラムで、会場内のインフォメーション的役割を担うブースを設置した。

おしゃれ着リメイクワークショップ/ファッションショー

シニアが持っている資源とスキルの活用を促し、クリエイティブ性を発揮する場を提案したワークショップ。お気に入りだったが着られなくなった服をもう一度よみがえらせるべく、プロの指導の下、リメイクに挑戦した。成果発表の場として、展覧会最終日にファッションショーを開催。オシャレをしてスポットライトを浴びるシニアのみなさんは輝いていた。

事例紹介: ファッションスナップ Siwa
「人のしわ × 服のしわ=Siwa」をコンセプトに、まちのお洒落なお年寄りにスポットを当て、スナップ写真を撮影する活動を行う神戸芸術工科大学の学生5名のチーム。今回、ワークショップとファッションショーまでの記録を担当した。

リサーチ: デートログ募集
date.KOBEプロジェクトで集めている、神戸でのデートの思い出(=デートログ)を会場内でも募集。「学校から家まで自転車デート。暗くなるまで話した兵庫駅近くの公園は、まだあるのかなあ」(30代男性) / 「北野坂のカフェでランチすると、いつもあの頃に戻れる」(40代男性) など。

リサーチ: 「モテ絵馬」アンケート
絵馬のかたちをしたカードで、来場者の恋愛観を探る(=モテ度をはかる)アンケートを実施。「愛する人の好きなお菓子」→欠点が可愛い(60歳女性) / 「愛する人にもらいたいもの」→笑顔とぬくもり(50歳女性)、天国(65歳男性) / 「愛する人と行きたいところ」→娘と一緒にパーに行き、楽しくお酒を飲みたい(52歳男性)

日直
日誌

外国人の方が来られました。自由にご覧くださいとお伝えしましたが、会場をよく見ると、展示のタイトルにも日本語でしか表記がなかったので、せめてタイトルには英語があったらよいかもしれません。(10月11日(日) 17:10 担当:安達)

認知症プロダクトラボ

認知症の人にとって、
思い出すことは、
クリエイティブな
ことだと思う。



英国での認知症に対する創造的な活動を紹介。認知症の方のためのプロダクトを開発しているデザイナー、Chloe Meineck(クロエ・マイネック)の滞在制作と、認知症の人たちの尊厳を守り、QOL(生活の質)を向上させる実用的な製品やサービスを展示した。(パートナー:ブリティッシュ・カウンシル)

関連
イベント

- KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2015 Chloe Meineck
- Chloe Meineck アーティスト・トーク
- レクチャー「高齢社会における文化芸術の可能性 英国を事例として」

コンテンツ

Music Memory Box

クロエ・マイネックが開発した「Music Memory Box」(以下 MMB)は、認知症の人とその家族のためのプロダクト。個人の記憶にまつわるオブジェが箱に入れられ、オブジェを箱にかざすと、そのオブジェにまつわる音楽が再生される仕組みで、記憶や感情を呼び起こす助けになり、家族や介護者とのコミュニケーションの糸口として機能する。会場では、過去に制作したふたつの MMB を展示。また、クロエが来日して、神戸版 MMB 制作のための調査を行った。来場者からは、「認知症になる前の備えとして、自分のために作っておいてもいい」などの声がかかった。

ODE 食欲を刺激する芳香装置

朝・昼・夕の食事の時間をタイマーで設定でき、各食の芳香を選ぶことができるという装置。英国・デザインカウンシルのソーシャル・イノベーション・プログラム「Living Well with Dementia」で選ばれ、製品化されたアイデアのひとつ。開発: Rodd Design, Lizzie Ostrom <http://www.myode.org/>

BUDDI: 携帯型個人用アラームリストバンド

アームバンドは常時携帯用で、動きを感じし、無線により通信することができる。クリップは外出用で、緊急応答センターに支援が必要な時の位置情報を知らせ、ハンズフリーで会話可能。同じく「Living Well with Dementia」により製品化されたプロダクト。

開発: buddi, Sebastian Conran Associates <https://www.buddi.co.uk/>

My House of Memories タブレット端末用アプリケーション

日々の思い出や行事などについて語り合うきっかけになるようにデザインされた、デジタル・メモリー・リソースのアプリ。英国のナショナル・ミュージアムズ・リバプールが開発。

事例紹介: 英国の文化芸術団体の高齢社会における取り組み
文化芸術機関による高齢社会に関する様々な取り組みは、医療や福祉といった既存のサポートに加えて、新たな切り口で課題にアプローチできるものとして注目されている。10/23湯浅真奈美氏レクチャーでは、認知症とその介護者のためのプログラムも数々紹介された。「Coffee, Cake and Culture」(ウィットワース美術館) / 「Music in Mind」(マンチェスター・カメラータ) / 「House of Memories」(ナショナル・ミュージアムズ・リバプール) など。

リサーチ: あなたの記憶に残る音楽・歌を教えてください!
聞くときと記憶が蘇ってしまうような、思い出の音楽や歌、それにまつわる品について来場者にアンケートをとった。
アンケート回答抜粋: 瀬藤太郎「花」(祖母と小さい頃お風呂に入った時に2人でハモった) / 松任谷由実「タワー・サイド・メモリー」(ポートピア81の翌年、高校生だった。大人になってから聞くと思い出の曲) / 並木路子「リンゴの唄」(物心ついた頃から口ずさんでいた) / 加山雄三「君といつまでも」(2人乗り用のヨットを作りながら聞いていた曲) / 川のせせらぎと風のささやき(若き日の職場で鮮明に残っている)

日直
日誌

若い女性2人が来場。公園ラボでしばらく遊んだり、おしゃべりしたり。そして公園活用のアイデアも貼ってくれていたようだ。(10月14日(水) 16:00 担当:神澤)

神戸滞在記

クロエ・マイネツク



英国のクロエ・マイネツクはデザイナーとして、認知症の人とその家族や介護者のための製品「Music Memory Box」を発表。今回、KIITO を拠点に約1ヶ月のリサーチと制作を重ねたクロエの日々を同伴者の日記から抜粋。

9/30 水 day 1

18時頃の関空着の便（トルコ航空）で到着予定のクロエを迎えに行く。KIITO 出発前に運行状況を確認したところ、1時間ほど遅れているとのこと、時間をずらして関空に向かった。スーツケース2つとリュックを持ったクロエと出口で初対面。乗り継ぎ前も遅れていたらしくお疲れの様子。

10/1 木 day 2

滞在先まで迎えに行き、KIITO へ案内。通訳Tさんまじえて、事前ミーティング、会場チェック、制作スタジオの環境を整える。お昼ご飯は KIITO CAFE で魚の南蛮漬。英国プラグ→日本プラグが必要／はんだごてを持参していたが変圧器はない／変圧器を買うよりはんだごてを買った方が安い、など。

10/2 金 day 3

通訳なしで1人作業。お昼ご飯はスタッフ、サポーターと同じ宅配弁当。梅干しはすっぱすぎたようです。リサーチシートの用意、キャプションを執筆してもらうなど。



10/3 土 day 4

LIFE IS CREATIVE 展オープニングの日。13時からオープン。一度会場に来てもらって、状況確認してもらう。イギリスではこういう考えや動きがないので「終活ラボ」に興味津々とのこと。15時からオープニングトークに出席。レセプションではたくさんの方がクロエに話しかけたりで、食べる間もなく、立ちっぱなしでハードだった様子。2次会では中国東北料理へ。くらげに挑戦して、テクスチャーがフルーツみたい、と新鮮な感想を言っていた。食べ物も勧めてみると何でも挑戦してくれる。

10/4 日 day 5

初めての休日。後で聞くと、有馬温泉と六甲のロープウェイに行ったとのこと。

10/5 月 day 6

「Music Memory Box」の箱の部分を作るため、王子公園駅近くの Magical Furniture の小寺さんを訪問。小寺さんに相談しつつ、箱に使う木材は桐、板の接合は「ちぎり」をやってみることに決定。お昼は、三宮駅高架下の長野屋でカレーそば。ご主人が英語OK、behind you の発音についてクロエと話し込むという面白い事態に。

10/6 火, 7 水 day 7, 8

引き続き「Music Memory Box」の調整作業、リサーチシートで得られた思い出に基づいたオブジェ制作など。調整作業はオンラインで UK の友人とやっているらしく、時差の関係で遅くまで作業していたよう。

10/8 木 day 9

認知症の方とご家族の取材2件。1件目は週1回、家族と一緒にセンターに通っておられる方々にヒアリング。60歳前後のまだお若い方が多く、クロエが事前にリサーチしていた唱歌、童謡、美空ひばりはあまり出ず、加山雄三、山崎まさよし、SMAP などが挙げられた。また、ダム建設関係のお仕事だった方が、ダイナマイトの音を聞くといろいろ思い出す、とおっしゃって興味深い。2件目はグループホーム。取材先を探すにあたって、多大なご協力をいただいた S さんによるご紹介の施設。90歳超で元気なおばあさま T さんにお話を聞く。大家族の長女として弟妹を世話し、結婚後は主婦として、洋裁和裁は当然こなし、と典型的良妻賢母な方であった。まったく違うタイプの2件、クロエにとって大いに刺激になったようです。

10/9 金 day 10

王子公園の Magical Furniture で木作業。大きな機械は小寺さんにお願ひし、穴あけ作業などはクロエ自身が行う。最初周囲全員が心配して周りを取り囲んだが、いつもやっているから大丈夫！と悠々と作業を進めていた。19時から KIITO CAFE で歓迎飲み会。



10/10 土 day 11

Magical Furniture 2日目。予定通り今日で無事完成。2個の美しい桐の箱ができた。お昼ご飯はモスバーガー。小寺さんの予想通り非常においしいと喜んでた。

10/11 日 day 12

休日。京都初訪問。重森三玲庭園美術館と京都国立近代美術館へ。吉田神社だるまみくじで大吉。

10/13 火 day 14

3件目の取材。ポートアイランドにある特別養護老人ホーム。こちらまた S さんのご紹介。「クロエ来所します」の掲示物が所内に掲示されていて驚き。90代男性お二人を取材させていただく。お一人目の話を聞いていると、音楽につられて95歳の女性がすーっと近づいていらして、自分の思い出の歌も教えてくださった。お二人目 S N さんは弟さんご夫婦と一緒に話を聞く。弟嫁さんが、震災のときにこれだけは、とわざわざ取りに戻ったという写真とともにいろいろお話を聞く。よく覚えておられる。犬の話をしているときの声を録音、写真を撮影させてもらった。

10/14 水 day 15

4件目の取材。個人宅に向う。娘さんとお住まいの92歳男性。ひ孫が13人、来春誕生予定の14人目がもしかしたら同じ誕生日になるかも！とのこと。元船乗りで、船の上では自分で何でもやらないといけない状況だったから、自炊から大工仕事から何でもこなす人で、ものの修理はお手のもの。また「ボケボシ」なる、ネジと板でできたオリジナルグッズ制作もしていたとか。クロエからは、この「ボケボシ」のミニチュアを作って入れるといいかも、というアイデアが出ていた。KIITO に戻った後は、これまでの取材のまとめなどで遅い時間まで作業。



10/15 木, 16 金 day 16, 17

体調不良で滞在先で静養する、近所で薬を買ってみるとメールが届く。

10/17 土 day 18

大事をとって滞在先で作業。まったく休めるわけではなく、手が止められない作業があるのがつらいところ。

10/18 日 day 19

KIITO 内スタジオにて黙々と遅くまで作業。どこが体調不良かというところ、お腹にきているらしく、まだ本調子ではないようです。

10/22 木 day 23

トークイベントの日。トークでは、Music Memory Box を作るに至った動機、なぜ音楽なのか（脳の反応比較）、制作のプロセス（ヒアリング後、どのようにオブジェに落とし込むか）、神戸でのリサーチで感じたこと、今後の展望などを幅広く話してくれた。終了後は関係者と三宮駅近くの「満園」で餃子など。水餃子に蒸し鶏のねぎとショウガを乗せて食べるのがベストだとのこと。

10/23 金 day 24

ミーティング1件。英国企業のビジネスをサポートする方と、これからのビジネス展開などについて意見交換。夜は、クロエ招聘に多大なご協力をいただいたブリティッシュ・カウンシルの湯浅真奈美さんのレクチャーに同席。英国の現状と取組みを、豊富なデータと事例で紹介いただいた濃密で有意義な時間だった。

10/24 土 day 25

お昼に、スタッフ発案による手巻きずしの会を開催。スタッフの一人が出前寿司店でアルバイト経験があり、握りずしをレクチャー。切り身の上に米を乗せた後にサッとひっくり返して完成させる工程がなんとトリッキーで盛り上がる。



10/25 日 day 26

展覧会最終日。クロエはボウタイとジャケット。おしゃれ着リメイクワークショップの成果を発表するファッションショーを見学。ニットのジャケットがいいね、とのこと。19時で展覧会が終了した後、スタジオスペースや展示物の撤収を行う。片付けのはずぐ終わってしまった。終了後は駅近くの居酒屋で軽くごはん。漬物は気に入る、焼き鳥のレバーは気に入らなかったようです。解散後は夜中にハーバーランドまで歩いてみたそうだ。誰もいないけどコンビニだけが明るかったと。

なお、会場ではすべての本にコメントをいただきましたが、誌面の都合上、それぞれ一冊のみ掲載いたします。

「年をとったら、本を読もう。」をキャッチコピーにして、会場の「シニアメディアラボ」では35冊の本が紹介されました。選書を担当したのは、関西の個性あふれる7書店のプロフェッショナルたちです。

プロの書店員が選ぶ、65歳からのブックリスト



01 山下賢二(ホホホ座) 選書テーマ/感傷的アンソロジー

自分はまだ43歳で、ご年配の本当の心持ちというのは想像の域を出ないのが正直なところ。なので自分の祖父・祖母にプレゼントするならばという視点で選びました。知らない新しいことよりも、経験してきた古いことの中に忘れてきた、または、見逃してきた大事なものがあんじゃないか?という時間の使い方を提案します。ちなみに、このテーマタイトルは、老境文学の名手・天野忠さんのエッセイから拝借しました。

BOOK LIST

- ・神も仏もありませぬ / 佐野洋子 (筑摩書房、2008)
- この本は絵本『100万回生きたねこ』で有名な著者が、63歳ごろに書いた作品です。「いったいいつになったら大人になるんだろう」と思って生きてきた自分が60歳を超える年齢になり、母の痴呆や愛猫の癌、そして自らの老いを感じながら「いつ死んでもいい。でも今日でなくていい」という境地で、痛快に愉快に暮らす日々を<正直に>記録したエッセイ集です。
- ・ポケット詩集 / 田中和雄・編(童話屋、1998)・昭和の神戸 昭和10~50年代 / 飯塚富郎・ハナヤ勲兵衛(光村推古書院、2014)
- ・茨木のり子の家 / 茨木のり子(平凡社、2010)・散歩で見かける草花の雑学図鑑 / 金田洋一郎(実業之日本社、2014)

02 村田 智(Fabulous OLD BOOK) 選書テーマ/絵本も人も時を経てまた輝く

65歳になった今、古い絵本を開いてみませんか。現代には無い発想や、今でも参考になる知恵や技術に触れる事ができます。それは、時を経て経験や知識を重ねた先人の話を聞いているかのようです。絵本は元々子供の為に作られたものですが、良質な紙やインクを使って作られた絵本は、大人でも十分楽しむ事が出来る、美術作品に成長している本もあるのです。1950年から60年代に活躍した作家のプロフィールもあわせて紹介します。

BOOK LIST

- ・ See and Say / Antonio Frasconi (Harcourt, Brace and Company, 1964) 子供達に、母国語以外の言語に慣れ親しんで欲しいとの考えから、英語、イタリア語、フランス語、スペイン語など4ヶ国のさまざまな単語を紹介した作品。木版画によるイラストが見事です。少しずつ異なるアルファベットの綴りを、まるで辞書を眺めているかのように楽しむことができます。
- ・ Know what? No, what? / Arline and Joseph Baum (PARENTS' MAGAZINE PRESS, 1964)・ Dis-moi / Camille and Bill Sokol (Holt, Rinehart and Winston, 1963)・ A KISS IS ROUND / Blossom Budney (Lothrop, Lee & Shepard Co., 1954/1965再版) ※後ろから4冊の書影はありません

03 中川和彦(スタンダードブックストア) 選書テーマ/楽しむ老人

65歳からの1冊を選ぶというご依頼。少し考えればわかることだったのですが、54歳の僕が自分より人生経験を積み重ねた方々に本を選ぶなんて無茶だなあ。じゃあここに選んだ本はなんなのか?単純に僕がかっこいいと思う著者の本を選びました。若々しいし、いつも楽しんでいる感じがする。楽しいっていうのは、苦しいことも含めてのような気がします。楽しめる本を選ぶきっかけになれば幸いです。

BOOK LIST

- ・ ミライノコドモ / 谷川俊太郎 (岩波書店、2013) 谷川さんの言葉は瑞々しい。歳を重ねるごとに年々若々しくなっていくようだ。お会いしてみるとご本人も瑞々しい。そしていつも思うことだが行動に無駄がない。とても合理的な方です。詩が苦手な方はあとがきをまず読んでください。
- ・ 町からはじめて、旅へ / 片岡義勇(晶文社、2015)・ 大人の男のこだわり野遊び術 / 本山賢司、細田充、真木隆(山と溪谷社、2013)・ 美しくなるにつれて若くなる / 白洲正子(角川春樹事務所、1998)・ オキーフの家 / マイロン・ウッドほか 訳: 江国香織(メディアファクトリー、2003)

04 朝野道則(ジュンク堂書店三宮店店長) 選書テーマ/わたしたちは正しかったのか? -今、そこにある現実

戦後70年。焼け跡から高度成長、そして失われた20年。昭和・平成の激動の時代を生きた団塊の世代であるみなさんは、マジョリティとして、社会を動かしてきた。しかしながら、現在の日本は様々な不安に囲まれている。もちろん全てに効く特効薬など存在しない。まずは現実を知ることからはじめよう。この状況を見れば、「リタイア」なんて言っていられないはず。まだあなたたちは、社会を動かし得るのだから。

BOOK LIST

- ・ 世界史の中の日本国憲法 / 佐藤幸治 (左右社、2015) 世界各国の憲法の制定は、同時に立憲主義の獲得の歴史であり、すなわち人権の獲得の歴史でもあった。この立憲主義が徹底的に攻撃・蹂躪されたのが、先の大戦期であったのだ。著者を初めとして、日本中の“学者”たちが、何故今こんなに危機感を持っているのか? いま私たちは、歴史の転換点に立っているのだということ、ひしひしと感じる。
- ・ すぐそばにある「貧困」 / 大西連(ポプラ社、2015)・ いま、大学で何が起きているのか / 日比嘉高(ひつじ書房、2015)・ 認知症・行方不明者1万人の衝撃 / NHK「認知症・行方不明者1万人」取材班(幻冬舎、2015)・ 寺院消滅 / 鶴飼秀徳(日経 BP社、2015)

05 今野雅彦(ボレボレ書舗) 選書テーマ/知っておきたい「日本」

明治維新そして敗戦後、諸外国に遅れをとらないようにと必死になって外国を学んできた日本人。その代わりに今住んでいる私たちの足もと、日本という国がどんな国なのかを知る機会を学ぶ時間がなかったのではないのでしょうか。どのような成り立ちで建国し、どんな文化を持っている国が日本なのかを改めて紹介したいと思います。もしかしら初めて接することもあるかもしれません。

BOOK LIST

- ・ 日本の昔話 / 柳田国男 (新潮社、1983) 「昔話」を先人が口伝えて語ってきた物語を著名な研究者である柳田国男が編集している。ひとつひとつの物語がお話と楽しめるほか、現代の知識をもって「この現象はこういうことが重なってこうなったのでは?」などと考察するのも楽しい。昔の日本人が何を畏れ、何を敬っていたかが散りばめられており、現代の私たちでも心の琴線に触れる感覚があることを改めて気付かされます。
- ・ ゼロから知る「古事記」 / CARTAシリーズ (学研パブリッシング、2012)・ ほくらの祖国 / 青山繁晴(扶桑社、2015)・ 鳩居堂の日本のしきたり豆知識 / 鳩居堂 (マガジンハウス、2013)・ につぼん洋食物語大全 / 小菅桂子(講談社、1994)

06 堀部篤史(誠光社) 選書テーマ/タフな老人たち

老成した味わいというものも確かに存在するが、重力に逆らうがごとくもがき続けるタフな老人たちの姿を見ると清々しい気持ちになる。年甲斐もなく、助兵衛で、老獪な姿に、われわれは自分たちの将来を見る。だって酒も飲みたいし、モテたいし、いつまでも趣味に没頭していたい。若者が読めば痛快で、年寄りが読めば腰が伸びる、そんな5冊をご紹介します。

BOOK LIST

- ・ 老人と犬 / ジャック・ケッチャム (扶桑社文庫、1999) 若者たちの理不尽な暴力を前に立ち尽くす老人。怒りを抑制しながら、道徳や礼儀の通じない粗野な人間たちに立ち向かうその姿は、年輪を重ねたからこそその凄みと、彼の元を去っていった愛するものとの時間を感じさせ読者の胸を熱く震わせます。圧倒的な暴力を描く鬼才ジャック・ケッチャムの作品群でも主人公に感情移入しやすい傑作。
- ・ 詩人と女たち / チャールズ・ブコウスキー(河出文庫、1996)
- ・ 植草甚一の研究 / 植草甚一(晶文社、2005)・ I've lived in east LONDON for 86 1/2 years (HOXTON MINI PRESS、2013)・ 俺は最低な奴さ / 内田裕也(白夜書房、2009)



07 山本善行(善行堂) 選書テーマ/年老いて益々盛んな作家たちがいる

作家の年譜を読んでいると、若いころより年をとってからのの方が元氣なのではないかと思うことがある。年とともに枯れていくのではなく、晩年に花が咲くような人たちである。作品を読むと、その中に彼らの経験エネルギーが込められていて、その発熱量に驚かされるし、また常識を飛び越えた自由な発想も感じ取れる。そのような作品を5つ選んでみました。私はこれらの作品を読んだとき、年をとるのも悪くないな、と思いました。

BOOK LIST

- ・ いつも夢中になったり飽きてしまったり / 植草甚一(番町書房、1975) 植草甚一は、映画評論家として活躍のあと、50歳ごろにジャズを聴き始める。その後、何かが溢れ出すような勢いで、ジャズについてのエッセイや外国文学の紹介などを雑誌に発表していく。65歳を過ぎて、初めてニューヨークに行き、その街を味わう。選んだこの本は、そんな植草さんの魅力がいっぱい詰まって楽しい1冊だ。
- ・ 忘れの構造 / 戸井田道三(筑摩書房、1987)・ 絵のなかの散歩 / 洲之内徹(新潮社、1998)・ JAMJAM日記 / 殿山泰司(角川書店、1983)・ 本が崩れる / 草森幹一(文藝春秋、2005)

E V E N T L I S T

2015
9.5
Sat
↓
10.25
Sun



トーク、対談、
ワークショップ、ファッションショー・・・
様々なイベントが開催されました。

10/3 sat

オープニング・レセプション
ふれあい給食アレンジメニュー提供
レシリアレンジ: さかもと 萌美 (口福塾)

10/4 sun

トークセッション
「高齢社会における、人生の作り方。」
出演: 門前貴裕 (株式会社木楽舎「孫の力」編集)
阪本節郎 (博報堂新しい大人文化研究所 統括プロデューサー)
モデレーター: 永田宏和 (デザイン・クリエイティブセンター神戸 副センター長)

10/7 wed · 14 wed · 21 wed

連続ワークショップ
「公園 × シニア × 健康の未来を描こう」
パートナー: 株式会社コトブキ

10/11 sun

ワークショップ
「いきいきとした地域づくりにおける
高齢者の役割」
ゲスト: 片桐恵子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授)
ファシリテショングラフィック: 石橋智晴 (NPO法人 EN Lab.)

10/12 mon·holiday

「omusubiトーク
地域情報紙プロジェクトの
これまでとこれから」
講師: 二階堂薫 (文案堂)、和田武大 (DESIGN HERO)
鎌田あかね (東灘区社会福祉協議会)

10/12 mon·holiday

「今と未来の終活のはなし」
講師: 秋田光彦 (浄土宗大蓮寺・應典院住職)
星野哲 (朝日新聞社 教育企画部ディレクター・
立教大学社会デザイン研究所研究員)
ファシリテショングラフィック: 石橋智晴 (NPO法人 ENLab.)

10/17 sat

ワークショップ
「編集を学ぶかべ新聞部」
講師: 藤本智士 (編集者 / 有限会社リテラ代表)

10/17 sat

「高齢社会における新しい防災の
カタチを多面的に考える。」
ゲスト: 太田直子
(たがしま災害支援ボランティアネットワーク「なまず」)
六條進 (前・神戸市兵庫区入江地区防災福祉コミュニティ委員長・
神戸市兵庫区入江地区防災福祉コミュニティ)
モデレーター: 永田宏和 (NPO法人プラス・アーツ 理事長)
主催: NPO法人プラス・アーツ

パン教室: 9/14 mon · 16 wed · 10/6 tue · 17 sat
カフェ開催: 10/17 sat

ワークショップ
「男・本気のパン教室」
「ライフイズクリエイティブカフェ」
パン教室指導: 西川功晃 (パンと暮らしのサ・マーシュ オーナーシェフ)

10/18 sun

「トーク・アラウンド・ザ・ブックス」
出演: 堀部篤史 (誠光社)

10/21 wed

「アルバム整理ワークショップ」
講師: 藤本智士 (編集者 / 有限会社リテラ 代表)

滞在制作: 9/30 wed - 10/25 sun
アーティスト・トーク: 10/22 thu

KIITOアーティスト・イン・レジデンス2015
Chloe Meineck /
アーティスト・トーク

10/23 fri

レクチャー
「高齢社会における文化芸術の可能性
英国を事例として」
講師: 湯浅真奈美 (ブリティッシュ・カウンシル アーツ 部長)
協力: ブリティッシュ・カウンシル

ワークショップ: 10/9 fri · 10 sat · 16 fri · 17 sat · 25 sun
ファッションショー: 10/25 sun

「おしゃれ着リメイクワークショップ」
「ライフイズクリエイティブ
ファッションショー2015」
講師: 見寺貞子
(神戸芸術工科大学芸術工学部 ファッションデザイン学科 教授)
アシスタント: 韓先林 協力: Siwa

10/25 sun

トーク
「ワクワクする高齢社会に向けて」
モデレーター: 永田宏和
(デザイン・クリエイティブセンター神戸 副センター長)
ファシリテショングラフィック: 石橋智晴 (NPO法人 ENLab.)

PROFILE



LIFE IS CREATIVE展のイベントに、ご出演いただいた方々、団体

LIST



秋田光彦

浄土宗大蓮寺・應典院住職

生前契約のお墓を中心に、生と死をつなぐコミュニティを提唱、また NPO と協働して、人生の末期を支援するエンディングサポートにも取り組む。



石橋智晴

NPO 法人 EN Lab. / グラフィックファシリテーター

大学生の頃、1人1人が気持ち良く学びに参加するにはどうしたらいいのか悩んでいた時にファシリテーションという言葉に出会い衝撃を受ける。それ以後は、ファシリテーターのあり方やファシリテーションのやり方を模索する日々を送る。現在は、大学院生として教育現場での実践研究に取り組みながらも、NPO法人 EN Lab.の理事として関西を中心に全国各地の企業や団体でグラフィックファシリテーターとして活動中。年間60ヶ所以上でファシリテーショングラフィックを行っている。



太田直子

たかしま災害支援ボランティアネットワーク「なまず」代表

1953年、滋賀県大津市生まれ。日本体育大学卒業。高校・中学校で保健体育科教師、講師を経て、1995年よりボランティアコーディネーターとして、10年間社会福祉協議会に勤務。2001年ボランティアグループ「なまず」を結成。「備えと構え」をテーマに減災を目指す活動を展開している。



片桐恵子

神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

専門：社会老年学、社会心理学。高齢者の社会参加活動、社会や他者との関わり、健康や健康行動などについて、社会心理学的な関心から高齢社会に関して広く国際的学際的な研究を行っている。



門前貴裕

株式会社トド・プレス 雑誌『孫の力』マネージングエディター

1973年、千葉県生まれ。編集者。1997年、双葉社の週刊誌にて編集キャリアをスタート。2005年、ハースト婦人画報社に移って映画誌やメンズファッション誌の編集に携わる。2007年よりトド・プレスに所属。ソーシャル&エコマガジン「ソトコト」の編集を経て、2012年から ANAグループ機内誌『翼の王国』やダイナースカードの会員誌『シグネチャー』のほか、60歳向けの雑誌『孫の力』の編集を務める。http://www.magonochikara.com



鎌田あかね

東灘区社会福祉協議会

神戸市立の児童館で指導員として0~18歳の子どもの健全育成に関わる。現在は、地域福祉ネットワークとして、高齢者や障害者、子ども、地域福祉全般について、専門職や地域住民、様々な人たちと一緒に取組み中。3男児の母。神戸市在住。



株式会社コトブキ

「パブリックスペースを賑やかにすることで、人々を幸せにする」を理念とし、公共空間向けの家具や遊具を製作するメーカーです。創立は1916年。大阪万博では「太陽の塔」の真ん中の顔を弊社の FRP技術で製造しました。人々が出会い、集い、憩えるパブリックスペースを、そのあり方から提案し、製品を生み出しています。いま、求められている“賑わい”は何か、その答えを見つけるのが私たちの使命です。http://www.kotobuki.jp



阪本節郎

博報堂 エルダーナレッジ開発 新しい大人文化研究所 統括プロデューサー

早稲田大学商学部卒業。(株)博報堂入社。プロモーション企画実務を経て、プロモーション数量管理モデル・対流通プログラム等の研究開発に従事。その後、商品開発および統合的な広告プロモーション展開実務に携わり、企業のソーシャルマーケティングの開発を理論と実践の両面から推進。2000年エルダービジネス推進室創設を推進。2011年春、発展的に「博報堂新しい大人文化研究所」を設立。所長を経て現在統括プロデューサー。http://www.h-hope.net



曽我部昌史

神奈川大学工学部建築学科教授、みかんぐみ共同主宰

1995年みかんぐみ共同設立。設計だけでなく、ワークショップの企画運営や評論の執筆、アートプロジェクトなど、多彩な活動を展開。主な作品に、「北京建外 SOHO低層商業棟」(2003)、「2005年日本国際博覧会トヨタグループ館」(2005)、横浜市の京急高架下文化芸術活動スタジオ「黄金スタジオ」(2008)、「BankARTLife-新・港村」(2011)、「EARTH MANUAL PROJECT展」(2014)の会場構成なども手掛ける。



永田宏和

デザイン・クリエイティブセンター神戸 副センター長 NPO 法人プラス・アーツ 理事長

1968年兵庫県生まれ。企画・プロデューサー。1993年大阪大学大学院修了後、大手建設会社勤務を経て、2001年「iop都市文化創造研究所」を設立。2006年「NPO法人プラス・アーツ」設立。2012年8月よりデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)の副センター長を務める。主な企画・プロデュースの仕事に、「水都大阪2009・水辺の文化座」、「イザ!カエルキャラバン!」(2005~)、「地震 EXPO」(2006)、KIITOシンポジウム「ちびっこうべ」(2012/2014) などがある。



二階堂薫

コピーライター

阪急百貨店で企画・宣伝を経験後、2000年、フリーランスに。衣食住をはじめ、行政、福祉、教育、最近では森や土など暮らしにまつわる領域にたずさわる。メディアやプロジェクトの企画・編集、コピーライティングを担当。2012~2014年は神戸芸術工科大学で、2015年から兵庫県立大学環境人間学部で非常勤講師をつとめる。兵庫・西宮生まれの神戸育ち。



西川功晃

サ・マーシュ オーナーシェフ

広島アンデルセン、東京オーボン・ヴュータン、東京と芦屋・ピゴの店を経て、神戸コムシワグループの荘司素オーナーに出会い、1996年、荘司氏とともにブランジェリーコムシワをオープン。2010年、神戸・北野にサ・マーシュをオープン。



長谷川明

長谷川日月建築設計事務所 / 建築家

神奈川と徳島の2拠点をベースに、全国で様々な設計プロジェクトに従事。神戸市危機管理センター防災展示室の改修計画(2015)では、展示計画、グラフィックデザイン、什器制作を担当。



韓先林

大学非常勤講師、韓国語講師

神戸芸術工科大学芸術工学部工業デザイン学科ファッションデザインコース卒業。神戸ファッション専門学校テクニカルコース卒業。フランスエコール・サンディカル立体裁断研修終了。自ら服をデザイン、制作してショーで発表するなどの作家活動をする一方、障害者の服作りなど社会・福祉活動に協力・参加している。



株式会社 POS 建築観察 設計研究所

「POS」は「POWER OF SITE」の頭文字からとったもので、「場所の力・現場の力」といった意味を持つ。場所・現場の力を大切に考え、建築空間、都市、街、地域を観察し、まちづくり、建築設計・施工、研究を行い、モノづくり / コトづくりを行うところ。http://pos-lab.com



藤本智士

編集者 / 有限会社りす代表

1974年生まれ。兵庫県西脇市出身。編集者。有限会社りす代表。『のんびり』のほか、吉本興業発行の「おおらかべ新聞」など、編集を軸にローカルデザインを考える事例が話題に。編集・原稿執筆を手がけた「ニッポンの嵐」は、発売4日で20万部を超える大ヒット。近著に『ほんとうのニッポンに出会う旅』(リトルモア)、『BabyBook』(コクヨ S&T) など。『のんびり』編集長。



星野哲

朝日新聞社教育企画部ディレクター 立教大学社会デザイン研究所 研究員

朝日新聞記者として25年以上前に墓や葬儀を取材した際、それらを通じてみえる家族のあり方や人間関係、社会の変化に興味を抱き、以来取材・研究を続けている。



堀部篤史

誠光社 / 元・恵文社一乗寺店店長

1977年生まれ、京都府出身。立命館大学文学部在学中から恵文社一乗寺店でアルバイトを始め、2015年8月まで店長を務める。店舗の運営の傍ら、音楽レベルとコラボした限定書籍の出版、イベントのブックリングなどを手掛ける。また、『本を開いてあの頃へ』、『本屋の窓からのぞいた京都』などの著書の他、フリーペーパーや雑誌への寄稿も行なうなど執筆活動も盛んである。



Chloe Meineck

Designer, Inventor

英国プリストル市のメディアアーツセンター、Watershed内でクリエイティブな活動と、最先端の研究や社会的な側面を持つ実験的プロジェクトを展開する Pervasive Media Studio をベースに活動するデザイナー。2012年大学を卒業後2つのレジデンスを経験。プリストルに移ってからは、社会的利益のためのインタラクティブ・テクノロジーのプロジェクトや、講師として英国各地でトークやワークショップを行っている。



丸山美紀

一級建築士事務所マチデザイン、一般社団法人アンド・モア / 建築家

住宅、保育所、学童保育施設等の設計の他、地方都市のまちづくりにも参加している。空き家活用事業を行う社団法人を長谷川明などとともに立ち上げ、建物単体の改修にとどまらず、まちづくりに寄与する活動を目指している。



和田武大

DESIGN HERO

1982年神戸生まれ。専門学校卒業後、デザイン制作会社を経て、2014年7月独立。グラフィックデザインを中心に、市民参加型イベントや教育現場などに活動の場を拡大しつつ、社会的なプロジェクトに関わる。デザインを広く見つめ直し、取り組み中。2009年より大阪デザイナー専門学校非常勤講師業務。



見寺貞子

神戸芸術工科大学芸術工学部 ファッションデザイン学科 教授

神戸ファッション協会理事や神戸市産学交流企画部会、中小企業技術ファッション部門のアドバイザーとして活動する一方、社会・福祉活動に協力・参加しながらユニバーサルファッション普及に努めている。



湯浅真奈美

ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

大学卒業後、国際産業見本市主催会社の広報部を経て、独立系の映画配給会社の劇場宣伝部に所属。宣伝プロデューサーとして、劇場公開映画の広報宣伝を担当。1995年、英国の公的な国際文化交流機関、ブリティッシュ・カウンシルのアーツチームに所属。2005年より現職。アーツ部門の担当ディレクターとして、日本におけるブリティッシュ・カウンシルのアートプログラムを統括。日英両国の文化機関と連携し、文化芸術を通じた日英間の交流事業、人材育成プログラムなどを担当。



六條進

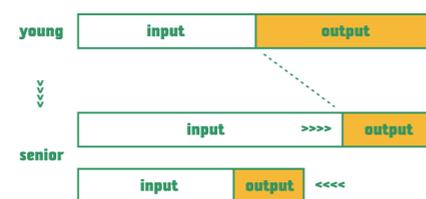
前・神戸市兵庫区入江地区防災福祉コミュニティ委員長

1947年神戸市兵庫区生まれ。早稲田大学卒。稲荷市場南入口で40年間菓子食料品店経営。現在地元のごどもたちが集う駄菓子屋を妻と細々営んでいる。東出町自治会副会長。

LIFE IS CREATIVE 展のあとで

高齢者が日々過ごす社会は本当に幸せなのだろうか。それは、それほど遠くない将来、自分自身が高齢になる時のことに思いを巡らせると、つまりは自分自身への問いでもありました。もちろん一言で「幸せ」といってもいろんな形の幸せがあるのだと思います。ある人にとっては美味しい料理を食べることが幸せであったり、国内や海外の観光地に旅行に出かけることが幸せだったりするのかもしれませんが。すべての高齢者にとっての、あらゆる幸せづくりに貢献することは不可能ですし、そんなことができることは決して思いません。では、私たちのようなクリエイティブをテーマに活動する組織にも担える、高齢社会における幸せづくりって何なのだろうか？ 高齢社会に私たちが寄り添い貢献で

[参考図]



きることは何かあるのだろうか？ そんなテーマを掲げ、スタッフたちやこのプロジェクトの協力者たちと議論に議論を重ねました。その結果たどりついた答えが、「高齢者自らが表現できる場や機会を創造し提供する、そしてその手助けをすること」で、それをテーマとした本展覧会の企画をスタートさせました。

高齢者にとっての「インプット」と「アウトプット」のアンバランス問題があります。参考図に見られるように、誰しも若い時は社会的にも肉体的にも充実し、余裕があり、日々の活動を通じて社会からたくさんのことを吸収（インプット）します。そして、吸収して得られた様々な情報や知識、技などをそのままだったり加工したりして、仕事や趣味、スポーツの場で同じくらいたくさん表現したり発信したり（アウトプット）します。ところが、歳をとると社会的には仕事をリタイアし、自分の時間が大幅に増えるため、インプットの量はそれに連動して確実に増えます。その一方で、最も重要な表現の場だった仕事なくなり、また肉体的な衰えも影響し、若い時のような豊富なアウトプットが徐々にできなく

なり、結果、両者の間にはアンバランスが生じることになります。ちなみに、参考図の最下段は、高齢者によっては活動の範囲や総量が激減してしまい、若い時のインプットとアウトプットの総量自体が如実に減ってしまう場合があることを表しています。

私たちはこれまで、クリエイティブの力を注ぎ入れて様々な社会課題の解決に取り組む「+クリエイティブ」というコンセプトを掲げて日々活動を展開してきました。そんな私たちが「+クリエイティブ」で高齢社会に対してできることは、ずばりこの「インプット」と「アウトプット」のアンバランスを解消するため、多様で魅力的な「アウトプット」の場を創造し、社会に提供することではないかと考えました。それを形にし、表現したのが、「LIFE IS CREATIVE展」です。「+クリエイティブ」の本質は、既成概念に捉われない自由な発想で、根元から問題を捉え直し、その分野だけにこだわらずに広い視野を持ち、様々な角度から物事や事象を考えることです。本展覧会で設定された「恋愛」「食」「終活」「メディア」など8つのテーマのラボ（研究所）で

は、この「+クリエイティブ」の手法を用いて、高齢者がもっとワクワクできるプログラムを構想し、一部はトライアルを行い、そのアイデアや成果を発表しました。ただ、この新たな取り組みはまだ緒についたばかりで、私たちはさらに研究やトライアルを重ね、私たちが活動する神戸はもちろん、全国各地で私たちが考案したプログラムを活用していただきたいと考えています。神戸で考案した様々なアイデアやプログラムを全国そして世界に発信する、これこそが私たちが提唱する「神戸モデル」の考え方です。この考え方に基づき本展覧会は来年度東京での巡回展を開催します。また、本展覧会でトライアルしたいくつかのプログラムは神戸の地で恒常的な開催の段階に移る予定です。私たちはこれからも本展覧会における様々な活動の歩みを止めず、調査研究や企画提案、そして現実社会でのトライアルを今後も重ねていきます。そして、これから日本が、世界が迎えようとしている超高齢化社会に対して人々がもっと希望を持てるよう、できる限りの貢献をしていきたいと思っています。

デザイン・クリエイティブセンター神戸
副センター長 永田宏和

LIFE IS CREATIVE展

高齢社会における、人生のつくり方。

2015年10月3日(土) - 25日(日) 11:00 - 19:00

休館 | 10月5日(月)、13日(火)、19日(月)

会場 | デザイン・クリエイティブセンター神戸(神戸市中央区小野浜町1-4)

主催 | デザイン・クリエイティブセンター神戸

アートディレクション | 寄藤 文平+ホ・ブイシヤン(文平銀座)

コピーライト | 岡本 欣也(オカキン)

会場構成 | 曾我部 昌史(神奈川大学工学部建築学科教授、みかんぐみ共同主宰)、長谷川 明(長谷川日月建築設計事務所)、

丸山 美紀(一級建築士事務所マチデザイン、一般社団法人アンド・モア)

後援

朝日新聞社、NHK神戸放送局、MBS、関西テレビ放送、Kiss FM KOBE、神戸市教育委員会、神戸商工会議所、一般社団法人神戸市老人クラブ連合会、神戸新聞社、産経新聞社、サンテレビジョン、日本経済新聞神戸本社、毎日新聞神戸支局、読売新聞神戸総局、読売テレビ、ラジオ関西

協力

株式会社木楽舎、神戸芸術工科大学、社会福祉法人神戸市社会福祉協議会、神戸市保健福祉局、神戸大学大学院人間発達環境学研究科、株式会社コトブキ、ネスレ日本株式会社、博報堂新しい大人研究所、NPO法人プラス・アーツ、ブリティッシュ・カウンシル

LIFE IS CREATIVE展は、「KOBEデザインの日」記念イベント、「神戸ビエンナーレ2015連携事業」として実施しました。

謝辞

「LIFE IS CREATIVE展 高齢社会における、人生のつくり方。」開催、及び関連プログラム、本書の発行にあたり、下記の方々に多大な協力を賜りました。ここに記し、深く感謝いたします。

給食会グループ たんぼぼ、神戸サロン、神戸市消防局垂水消防署、神戸市消防局予防部予防課、神戸市生活指導研究会、多聞台防災福祉コミュニティ、本山第二小学校区防災福祉コミュニティ、昭和日常博物館、須磨在宅福祉センターおひさまの会、一寺言問を防災のまちにする会、亀沢3・4丁目町会、上ノ原まちづくりの会、御影北ふれあいのまちづくり協議会、本山東福祉活動推進会、アサヒグループ食品株式会社、秋田 さゆり(Siwa)、秋元 七生(ブリティッシュ・カウンシル)、朝野 道則(ジュンク堂書店三宮店)、池奥 義征(須磨在宅福祉センター)、市川 千代子、宇山 満三、岡田 修一(神戸大学)、岡本 敏一、小原 美穂(博報堂)、影本 峯子(神戸サロン)、梶原 信子(介護老人福祉施設 ぼー愛)、川池 和代、川谷 充郎、北垣 多香子(神戸市灘区社会福祉協議会)、國重 裕太(Siwa)、小寺 昌樹(Magical Furniture)、小林 瑠音、今野 雅彦(ボレボレ書舗)、笹貫 隆、塩見 洋子、須藤 千佳(ブリティッシュ・カウンシル)、竹内 厚(Re:S)、辰田 あさみ、田中 裕一(かたちラボ)、つかもとやすこ、中川 和彦(スタンダードブックストア)、西 禎子(給食会グループ たんぼぼ)、後野 真(吹田市都市整備部千里再生室)、平木 豊、福本 秀次、堀口 努(underson)、前田 健治(mem)、松下 良太郎、松田 登、松原 雅子(神戸市介護保険課)、宮本 麻未(Siwa)、村上 龍一(Siwa)、村田 智(Fabulous OLD BOOK)、森本 早苗(本山東福祉活動推進会)、森山 耕一(グループホーム希望の家)、柳谷 菜穂(Siwa)、山口 晶(Team クラブトン)、山口 はるか(Re:S)、山下 賢二(ホホホ座)、山本 茂(千里市民フォーラム)、山本 善行(善行堂)

LIFE IS CREATIVE展 サポートスタッフ

秋松 裕子、足立 智子、有村 祐一、粟井 久仁子、岩崎 大輔、上野 真人、浮田 祝美、梅宮 良輔、大浦 宇海、梶 咲月、金尾 沙衣子、紙野 永子、神澤 郁子、北野 裕介、久保田 琴美、定雪 実幸、長峰 秀和、成安 有希、仁瓶 光夫、橋本 阿姫、埴岡 寿子、濱本 豊、原 淑恵、平原 佳栄、堀田 紗千、本家 望、本郷 武志、村上 芽依、本橋 豊、森本 明子、八木尾 志穂、安廣 すず恵、安廣 恵、山下 紗知、吉田 瑛里奈



「高齢社会における、人生のつくり方。」の本
LIFE IS CREATIVE 展
ドキュメントブック

企画・制作 | デザイン・クリエイティブセンター神戸
アートディレクション&デザイン | TRITON GRAPHICS
編集 | 竹内 厚 (Re:S)
写真 | 伊東俊介 (P.07,22,23,32,37,40,41)
大塚杏子 (P.11,13,24,25,29,30,33,34)
片山俊樹 (P.26,27,36)

発行 | デザイン・クリエイティブセンター神戸
〒651-0082 兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4
078-325-2235
info@kiito.jp
http://kiito.jp/

2016年3月発行
©Design and Creative Center Kobe